

夜のタブロー

多谷 昇太

詠むべしや、否、かなうなら
絵に託してんや、この怪しなる…

幾時とも知れぬ夜のこと、図書館の前、
その一隅を照らす街灯のあり。

霧まごう小雨に木立ちの影あやしく揺れて、
明かり落とせし館内と、前なる歩道に人はな
し。

我目フィクスせしこの景を、一枚の絵とぞ、
見るはいかなる我カルマならん。
是非もなく、いとしきはこの絵。

時の止まりたる、夜のタブローなりき。

この絵中、唐突に入り来たれるものあり。

そは闇に浮かぶ白き花、

制服身につけし、ひとりの女子高生とぞ。

何者かに追われるごとく怯えつつ、しかし声

はなく、館前に施錠せし自転車の鍵をもどか
しげに解かんとすめり。

この乙女のいづくより出で来たれるや？

閉館したる図書館の中、はたまたフィクスの

外、異次元の闇の淵より出で来しものか。

その乙女の姿街灯に照らされて館に映え、

シルエットの大きく怪しく踊る。

折しもよ、

これに迫り来る今一つのおぞしき影あり。

両手を前に翳しつつ、

左下方より絵中に入り来んとす。

「求むるは闇の中の光：苦き世の甘美なる実
：あまつ乙女たるこの少女なり：我に遠ざけ
られし禁断の実、麗しの花：遠くな行きそ、
我を忌むなかれ：かつてエルデンの園にて彼
の実をば、共に食みては追われしを：いま汝
がその禁断の実となりはてて我を厭うは何ご
とぞ：世の奢侈に溺れ、女王の薨に寝るが本
望か：我をバリアとし、バルバロイとし、世

の的とに晒しては闇の淵に葬りさるが本望か
：おのれ、さらば闇の淵よりかく現れ来、汝
を道連れに沈み行くまで：おおおお、ああ
ああ。乙女よ、乙女、逃すものかは！」

時が返った。

図書館前の階段を上って来た男があっけなく
女子高生の前を通り過ぎて行く。女子高生も
自転車に乗って家路へと就くようだ。時刻は
閉館少し前の午後八時頃か。三々五々他の来
館者たちも帰って行くようだ。

いったい何を見たのだろうか？

街灯に照らされた館前の一角が小雨に煙り、
そこに浮かんだ木や人のシルエツトがいかに
も幻想的で、偶さか現れた女子高生をそこに
見た時、画像がフィクスし、時が止まったの
だった

。だから：

この、夜のタブロー、を描いたのはこの俺で、
それに見入っていたのもこの俺だ。そして迫

り来る怪物も俺だったのに違いない。俺は人
と、現実と交われぬ男。闇に潜む、オペラ座
の怪人。

いとしきはただ、この、夜のタブロー、なり

：
おお、乙女子よ！

我、エルデンより追われし者にあらず。汝に
見立てし清心ともに、この世に園を為さんと、
そこゆ降り来たりし者ぞ。さるを：

いま俗世に惑わされ、汝を失いたるはいかな
る愚迷のザマなるや。この失念がむた斯くも
醜き

、悍しき形となるは道理ぞかし。

おお、汝、乙女よ！

我、闇の怪人となり果つるとも、
汝を忘れることよにあらざらん。

我をば忌むな、恐れるな。君、忘れじの清心
の、甘き実よ！いま再び我をも引き連れ、汝

が降臨の願いに戻れよかし。
我にやさしき言葉を掛けさせたまえ、
再びの天使の笑みを投げさせたまえ：

〈乙女〉

「キヤアアアアア！ やなこった。図書館に潜
むオペラ座の怪人め、プータローめ！」



【夜のオペラ座風景】